

留学生交流支援制度（ショートビジット）採択プログラム

海外語学実習

山形県立米沢女子短期大学教務学生課教務学生主査 遠藤 直記

ENDO Naoki

【プログラム設立経緯】

山形県立米沢女子短期大学は、「豊かな教養に裏付けられた専門的な知識と技能を身に付け、着実に社会を支える女性の人材育成」を目的として、1952（昭和27）年に創立された5つの専門学科を擁する総合短期大学である。本学が設置されている山形県は、1986（昭和61）年にアメリカ合衆国中西部に位置するコロラド州と姉妹県州盟約を締結し、1989（平成元）年以降、県内の教育機関、市町、団体、民間企業等多様な機関がコロラド州ゆかりの組織や団体と姉妹・事業提携を結んできた。近年においてもその友好的関係性は継続されており、様々な文化・経済交流が盛んに行われている状況にある。

このような中、本学は1990（平成2）年にコロラド州リトルトンにある「アラパホ・コミュニティーカレッジ（Arapahoe Community College）」と姉妹校協定を調印し、当該協定に基づき本学国際交流委員会と姉妹校との交流計画の合意を得、異文化理解を主眼とした本学学生の姉妹校への海外滞在型プログラムを姉妹校協定締結の次年度より実施している。

当該プログラムは「海外語学実習」として教養科目の共通基礎科目のひとつと設定し、3単位を付与しており、主な参加学生は1年生となっている。

【プログラムの目的】

本プログラムは、学生の活きたコミュニケーション能力の向上と異文化及びその歴史理解を促すと共に、より国際的な感覚と視野を育成することを目標とし、グローバル社会に適応した人材の養成といった近年の社会的需要の要請に対応し展開されている。

本プログラムは、学生の今後の高等語学教育への第一ステップとも位置付けており、国際感覚の涵養という目的達成のための動機付けを行う機会としている。すなわち、学生が抱えている海外留学や異文化理解、外国語の学習体制の在り方等に対する漠然とした考えを再構築のうえ明確化し、異文化理解の魅力とそのために必要な能力、その修得方法について深く考えさせる事が狙いとなっている。

また、前述の「高等語学教育への第一ステップ」については、本学学生の特徴的な進路傾向である「編入学」に対するキャリア形成教育上の指導という面も併せ持っている。

本学は、例年卒業生の約3割が4年制大学へ編入学しており、特に英語英文学科においては約半数の学生が進学している。本プログラムに参加する学生の多くも「編入学」を希望している状況にあるため、このような学生に対し異文化理解を軸とした、

将来設計・キャリア形成の視点から見た学習環境としての編入学の在り方について、学生自身の気付きと決意を醸成する重要な契機とすることも本プログラムの目標の一つとなっている。



コロラドの国立公園での実習で、各人がアメリカの大自然を肌で感じる。(山小屋での一コマ)



ACC (Arapahoe Community College)でのレッスンは和やかな空気で進められる。

【これまでの実績】

本プログラムは、海外での大規模テロ事件の発生等により実施を見合わせた年もあったが、1991（平成3）年度より現在まで長年にわたり継続実施され、これまでの20年間で延べ約400名の学生が研修に参加している。この長期に及ぶプログラム実施により得たノウハウや経験の積み重ねにより、学生が参加し易く学習効果が高い内容へとプログラムは深化・拡充しており、参加学生数も年々増加している。

特に近年における参加者数の伸びは顕著であり、これは海外留学や国際理解の社会的浸透や、外国語に関する高等教育・実践教育への関心の高まりが反映されていると共に、日本学生支援機構からの奨学金の付与により学生の経費負担が軽減されたことも大きな要因となっているものと考えられる。

■「海外語学実習」参加者数の推移

年度(平成)		15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
1年次参加者数		6	10	0	27	21	13	25	35	39	37
2年	〰	0	2	0	3	1	0	0	0	0	0
計		6	12	0	30	22	13	25	35	39	37

※24年は予定者数

■参加者のうち、本学卒業後に4年制大学に編入学した学生の数の推移

年度(平成)		15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
1年次参加者数		0	5	0	10	9	5	14	21	—	—
2年	〰	0	0	0	1	1	0	0	0	0	—
計		0	5	0	11	10	5	14	21	—	—
編入学率		—	42%	—	37%	45%	38%	56%	60%	—	—

【事前指導】

本プログラムは、学生の高等語学教育への第一ステップとして位置付けていることから、多くの学生に国際的な感覚と視野を身に付けてもらうことを願い、英語英文学科以外の学科に在籍する学生の参加も受入れている。申込にあたっては、英語コミュニケーション能力に基づく選別は行わず、興味・関心がある全ての学生に門戸を開いている。

しかし、学生が本プログラムに参加するに際しては、英語圏での生活の確保と授業の理解を担保する必要があるため、最低限の基本的な英語力は求められる。参加学生の多くは英語英文学科に在籍し、ほぼ全員が英検準2級程度の英語コミュニケーション能力を有しているが、他学科の学生を含め英語圏での生活に求められる英語レベルに満たない学生や不安を抱えている学生に対しては、事前に能力別の英語学習を入念に行い、実習本番に備えている。

また、参加学生の多くが初めての渡航・留学である場合が通例であるため、ホストファミリーとの生活面に不安を抱く者や、海外留学や国際理解について漠然としたイメージしか抱いていない者も少なくない。このため、現地の歴史や生活・異文化理解等についても事前学習を行い、現地での授業に対応する予備知識の修得を図るとともに、学生の留学・異文化交流に対する意識の明確化、生活面での不安の解消を図っている。

更に、実習に先立ち筆記試験（リーディング、文法、リスニング等）によるプレテストを実施し、参加学生の個々のレベルに対応した現地学習ができるよう、受入れ校と事前の調整を綿密に行っている。併せて渡航後も現地受入れ校教員による参加学生の個人面接を早々に実施し、現地指導員の判断に基づく能力別クラス編成により、学生が無理なく学習できる環境づくりに最大限の配慮をしている。

【プログラム内容】

本プログラムにおける語学研修の内容は、主に①姉妹校での授業と実習によるアメリカ合衆国の歴史と生活等の歴史的異文化理解、②ホームステイでの生活を通じた社会的異文化理解、③地元の公立学校や住民との交流会等による異文化交流を柱としている。

- ①歴史的異文化理解については、受入れ校教室での授業や屋外のフィールドワークを通じ、開拓者の努力や広大な国土のインフラストラクチャーと社会制度の整備などアメリカ合衆国の営みを直に感じ取れる実習をしている。
- ②社会的異文化理解については、ホストファミリーや地元住民の協力により、アメリカ合衆国ならではの衣食住を体験するとともに、ショッピングやフィールドワークを実施し、日本との生活様式や社会感覚の違いを体感することができるようプログラムを構築している。
- ③異文化交流については、現地の高等学校や地域住民との交流会を開催し、多民族国家であるアメリカ合衆国の社会文化を体験する機会を設け、国際的な感覚と視野を育成するための体験づくりを促している。また、受入れ校では、同校に留学しているアメリカ合衆国以外の諸外国からの留学生も交えた授業を設定してお

り、多様な文化と接する機会を設けている。

【プログラムの効果】

本プログラムに参加した学生に対しては、参加後のレポート提出を義務付けている。当該レポートの内容を元に、本プログラムの目的である「学生の活きたコミュニケーション能力の向上と異文化及びその歴史理解を促すと共に、より国際的な感覚と視野を育成する」という事項について、参加学生の心的変化に絞り、目的の達成状況及びプログラムの効果について次のとおり検証した。

- ①教科書や授業だけでは学べないものを実体験として学ぶことにより、自身の英語力向上に対し意欲を高めている。
- ②異なる文化・生活に触れ、それを理解し受け入れると共に、日本の文化を積極的に伝えようとする土壌が醸成されている。
- ③未体験であるが故に留学に対し抱いていた不安が、経験を経て自信に昇華しており、より多くの国際経験を重ねようとする能動的な感情が発現している。

上記結果より、本プログラムは、学生が持つ海外留学や異文化理解、外国語高度教育に係るイメージを再構成し、国際交流に対し積極的に働きかけようとする意識と前向きな学習意欲を引き出すことができたと言える。これは、本プログラムが目的とする「学生の活きたコミュニケーション能力の向上」、「異文化及びその歴史理解の促進」、「国際的な感覚と視野の育成」を達成するために根源的に必要となる「国際人として成長するための精神的基盤を形成する効果」であり、まさに「高等語学教育への第一ステップとの位置付け」として、その目的を達したものと評価している。

また、本学は4年制大学への編入学希望の学生が多く、毎年多くの学生が進学している。特に本プログラムに主として参加している英語英文学科では、例年東北地方の国立大学への進学者が多く、本プログラム参加者も約半数が進学している状況にある。この結果から、本プログラムの参加学生を通じ、編入学による外国語の高度教育の必要性を求める全学的流れが生じ、大学全体の進学希望者の底上げと学習意欲の増進に影響を及ぼしているものと考えられる。



英語予備コースには、世界の国々の留学生が集まる。学生はその国際的雰囲気を楽しむ。



休憩時間中、実習学生は積極的にクラスメートとのコミュニケーションを試みる。

(参 考)

■参加学生のレポートから（要約・抜粋）

- 1) プログラム参加前後の海外留学や国際理解について意識の変化（参加前⇒参加後）
 - ・自分の文化が理解してもらえないか不安で、相手の文化に自分を合わせようと思っていた。⇒合わせるだけでなく、自分の文化を積極的に伝え、分かりあいたいと思った。
 - ・日本にいても英語力を伸ばすことができる。留学までする必要はないと思っていた。⇒英語を日本語のように話せるようになりたい。留学し、辞書にも載っていない言葉を理解したい。
 - ・ニュース等で他国を知る機会はあるが、異文化を理解しようとは思っていなかった。⇒驚く事が沢山あり、異文化に対する壁が無くなった気がする。
 - ・英語圏の友人と遊んだりメールをしていたので、実習でも通じると思っていた。⇒話す相手が英語圏の人だけではなく苦労した。自分の英語力の無さを痛感した。
 - ・留学は懂れていたが、英語力の欠如を理由に実行できずにいた。⇒常に様々な国の人と実践的に話し続けることが大切だと感じた。
- 2) プログラムに参加しての海外留学、国際理解に対する想い
 - ・もっと勉強してもう一度留学に挑戦したい。
 - ・留学は、自分と自分の国、相手と相手の国など様々な事が分かり、人生を豊かにすると思います。
 - ・沢山の出会いがあり、自分の英語力でもコミュニケーションがとれたことが嬉しくて、もっと海外で様々な体験をしたいと思った。
 - ・ここがスタート地点になった気がします。長期留学したいという思いが強くなりました。
 - ・人生の宝物になった。しかしこれがゴールではなく、私の国際理解のスタートだと思う。本物の経験を経て、やっと私の国際理解が始まったと感じる。
- 3) その他の前向きな効果の発露
 - ・もう一度自分の英語の学習の仕方を見直したい。
 - ・日本に帰ってからの自分の進路に対して、もっと真剣になろうと決めた。
 - ・知らない世界に自分を放り込んでも、私はそれに適応する能力があると思った。どんどん知らない世界に行こうと思った。
 - ・海外で仕事をしてみたいと思った。
 - ・卒業後就職しようと思っていますが、留学も視野に入りたいです。

【今後の課題】

本プログラムは長年の実績・経験により、充実した内容と高い安全性を確保しているが、参加学生からの意見では実施期間に対する要望もあり、改善の余地があるものと見受けられる。参加学生からのプログラム評価は高く、満足度も高いが、長期にわたる留学経験を望む声も少なくなく、2週間という実施期間については短いと感じている傾向がある。これは現行プログラムを学生が積極的に楽しんで参加していることの表れであり、充実した毎日であるからこそ2週間があつという間に過ぎたという感

覚を有するものであると推測する。これら学生の声を真摯に受け止め、より良いプログラムを作成する責務を大学は負うため、できる限り要望に対応するよう検討が必要であるが、短期大学である本学は、履修期間が2年と短く、2週間超のプログラム期間を設定することは、カリキュラム全体へ影響を及ぼすことが想定されるため、慎重な検討が必要となる。

また、プログラム参加には渡航費用や諸経費も発生する。高額な学生負担が、プログラム参加への門戸を狭めているという状況もある。この度、日本学生支援機構からの奨学金の付与により、学生の経費負担は大幅に軽減されたが、未だ負担額は高額であり、保護者の協力・支援が不可欠なものとなっている。参加希望にも関わらず経済面から断念せざるを得ない学生を1人でも少なくするため、更なる経費抑制を図ると共に、学外の資金援助制度の活用はもとより、学内奨学金制度等についても検討していく必要がある。

【最後に】

本来であれば、2012（平成24）年度より本プログラムは本学から姉妹校への学生派遣のみならず、姉妹校からの受入れも実施する予定となっていた。しかし、昨年3月に発生した東日本大震災の影響により受入れ体制の確保が困難となり、やむなく実施を見送ることとなった。

本学が設置されている山形県米沢市は、上杉鷹山や直江兼続、前田慶次らゆかりの歴史・文化資産が豊かな土地であり、市内全域に歴史資産を擁する市全体が一つの博物館とも言える地域である。特に江戸時代中期の米沢藩の名君「上杉鷹山」は未だ市民に尊敬の念をもって親しまれ続け、その精神は現代も市民の生活スタイルの根底を支えている。第35代アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディに、「日本で最も尊敬する政治家」と言わしめた鷹山公が唱えた「質素儉約」、「三助（自助・互助・扶助）」の精神が未だ色濃く根付いている街が米沢市である。

このように、日本の歴史文化と助け合いの心が高いレベルで結合している米沢は、海外の若者を受入れ、日本の文化と魅力を理解してもらう地として極めて適した場所であると感じている。本学としても姉妹校からの留学生受入れを契機に、本学を地域の国際交流の拠点とし、本プログラムを通じ積極的に米沢市を含む近隣地域を海外の若者に知っていただくを考えていたところであったため、震災による留学生受入れ中止は非常に残念な結果となった。

しかしながら、鷹山公の名言である「なせば為る 成さねば為らぬ 何事も 成らぬは人の なさぬなりけり」のとおり、震災による影響も本学教職員全員で払拭し、近年のうちに留学生受入れを実現させるべく努力していきたいと考えている。